

新しい情報と古い情報

小 川 洋 通

NEW INFORMATION AND OLD INFORMATION

Hiromichi OGAWA

1

ことばは、話し手から聞き手へと情報を伝達するものである、としよう。この場合、話し手が伝えんとする情報には、二つある。一つは、話し手が聞き手にはじめて伝えんとする、未知の情報であり、もう一つは、話し手も聞き手もすでに了解済みの、既知の情報である。ここに、前者を新しい情報といい、後者を古い情報という。¹

古い情報とは、話し手と聞き手とが共にする、共通の状況であるということができよう。この場合、それが言語的に与えられるときと、そうでないときとがある。つぎのような文が発せられる状況を考えてみよう。

- (1) a. The box is empty.²
b. The box was empty.

(1a) は、たとえば、箱がいま、話し手と聞き手との眼前にあるような場合であり、(1b) は、たとえば、箱が、いま両者の眼前にはないが、それが話題にのぼっているような場合である。前者が具体的、場面的状況であり、後者が抽象的、言語的状況である。

新しい情報・古い情報という概念は、これまでも、話題・評言 (topic - comment) あるいは、焦点・前提 (focus - presupposition) などという概念によっても説明が与えられてきている。³ なお、有標・無標 (marked - unmarked) でいえば、新しい情報は有標、古い情報は無標ということになる。

(1)の例に明らかなように、それ(新・旧情報)は、典型的には主語・述語 (subject - predicate) という概念で、表面上あらわれる。また、注2に示したように、イントネーションも、その表面的なあらわれである。もちろん、表面的な主語・述語やイントネーションが、意味的な新・旧情報と、つねに一対一に対応するわけではない。また、新・旧情報と

いう概念は、名詞や動詞に独立に適用する概念ではなく、それらが文中でしめる意味的機能に関する概念でもある。

2

つぎのような文は不自然である。

- (2) a. *A box is empty.⁴
b. *(Some) boxes are empty.

この不自然さは、どこからくるのであろうか。いま、これらの文の成りたちをみてみよう。まず、名詞 *box(es)* は、(a)、(b)ともに definite (定)でないということ。これは、定冠詞 (definite article) がないことから明らかである。つぎに、名詞 *box(es)* は、(a)、(b)ともに generic ではないということ。これは、(b)に *some* がある場合は、generic と *some* とは共起しえないから、明らかに nongeneric である) ほんらい、名詞 *box(es)* は generic になりうるが、*empty* は nonrelative state⁵ であり、ゆえに nongeneric であって、その結果 *box(es)* も nongeneric となってしまうからである。

上にみたように、名詞 *box(es)* が、definite でも generic でもないときには、なぜ、そのような文は不自然になってしまうのであろうか。いいかえるならば、古い情報を示す名詞は、なぜ、definite であるか generic であるかでなければならないか、ということである。この理由は、そもそも古い情報とはなにかというに、それは、聞き手にとってすでに既知なる情報である、ところで、われわれが、この既知性を示すには、definite な名詞によるか、あるいは generic な名詞によるしかないということにある。

けっきょく (2) の文の不自然さは、とうぜん古い情報であるべき主語の位置に、nondefinite, nongeneric な、聞き手にとって未知なる、新しい情報を示す名

詞が置かれていることにある。もし、(2)の文を自然なものにするには、つぎのように、nondefinite な *a* を definite な *the* にかえるか、

(3) a. The box is empty.

b. The boxes are empty.

あるいは、nongeneric な *empty* を、generic な、たとえば *container* にかえるかである。

(4) a. A box is a container.

b. Boxes are containers.

一般に、通常文⁶においては、もし、そこに名詞が一つしかあらわれないとき、それは旧い情報を含み、動詞（形容詞もふくめて）は、新しい情報を含むといえる。

(5) a. The box is empty.

b. David laughed.

ところで、つぎのように、二つの名詞があらわれる文を考えてみよう。

(6) a. The box is under the table.

b. David emptied the box.

c. Lisa received a present.

ここでは、文の最後にあらわれる名詞に音調の中心がある。しかし、通常文においては、これらの場合さらに、動詞もまた新しい情報を伝えるものであり、たとえば、つぎのような対応する疑問文を考えることができる。⁷

(7) a. Where is the box ?

b. What did David do then ?

c. Why is Lisa so excited ?

新しい情報の指定に関して、ある規則が存在することがわかる。

- 動詞は、つねに新しい情報を伝える。⁸
- (6 a)にみられるように、location noun もまた、つねに新しい情報を伝える。
- (5 a)、(6 a) にみられるように、patient noun⁹ は、もしそれだけであるか、あるいは、さらに location noun だけを含むときには、新しい情報は伝えない
- しかしながら、(6 b, c) にみられるように、patient noun¹⁰ は、もし agent noun か beneficiary noun を含むときには、新しい情報を伝える。

さらに、beneficiary noun と agent noun との両方を含む、つぎのような文を考えてみよう。

(8) David gave Lisa a picture.¹¹

動詞と、*picture*、*Lisa* は新しい情報を含み、

David だけが旧い情報を含むものである。このことから、つぎのことがいえる。

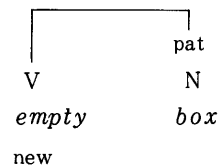
- beneficiary noun は、agent noun をさらに含むときには、新しい情報を伝える。

3

いままでみてきたように、通常文においては、それが名詞を含むかぎり、つねに一つ、しかも一つだけ必ず旧い情報を伝える。この旧い情報を伝える名詞は、もし agent があれば agent、agent がなく、beneficiary があれば beneficiary、agent や beneficiary がなく patient があれば patient である。location は patient なしには生じない、もし、この二つだけであれば、patient は旧い情報を、location は新しい情報を伝える。

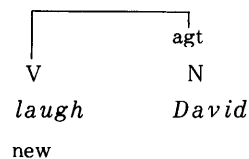
けっきょく、新しい情報の指定に関しては、location、patient、beneficiary、agent というような階層を認めることができる。これを Chafe によって示せば、つぎのようである。

(5 a)



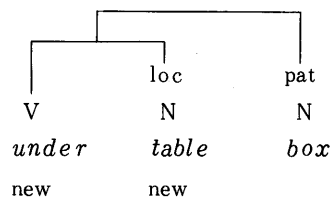
The box is empty.

(5 b)



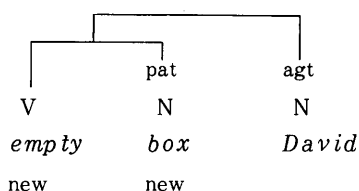
David laughed.

(6 a)



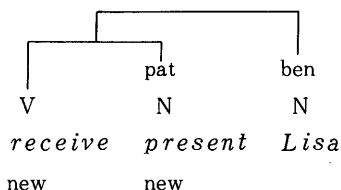
The box is under the table.

(6b)



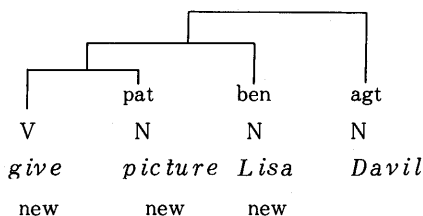
David emptied the box.

(6c)



Lisa received a present.

(8)



David gave Lisa a picture.

二つの名詞を含む文においては、patient noun は新しい情報を伝え、agent noun は旧い情報を伝える、というのが上にみた原則であった。しかし、これが逆転し、patient noun が旧い情報を伝え、agent noun が新しい情報を伝えるということもある。受身文がまさにこの場合である。

(9) The box was emptied by David.

さらに、新旧情報が交替する例として、つぎのような場合がある。

(10) a. The box is under the table. (= 6a)

b. The table has a box under it.

(11) a. The pencil is in the box.

b. The box has a pencil in it.

c. The box contains a pencil.

これに関連する議論としては、さらに Fillmore (1968)¹²などを参照のこと。

4

われわれが、これまで考察を与えてきたのは、通常の文である least marked sentences であった。

しかしながら、つぎのような more marked sentences がある。

(12) a. The box is empty.

b. David emptied the box.

これらは、動詞ばかりでなく名詞もすべて、新しい情報を含むものである。¹³ これらに対応する疑問文は、(6)の場合とは異なり、それぞれ、つぎのようであると考えられる。

(13) a. What's the matter ?

b. What happened then ?

さらに、つぎのような文を考えてみよう。

(14) a. The box is empty.

b. David laughed.

(15) a. David emptied the box.

b. David emptied the box.

c. David emptied the box.

(16) a. The box was emptied by David.

b. The box was emptied by David.

c. The box was emptied by David.

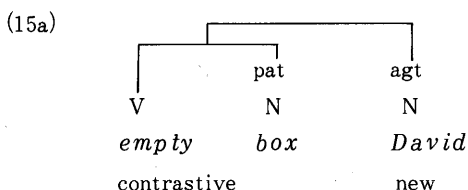
これらの文において、新しい情報を伝える名詞や動詞は、それぞれ、選択可能なあるリストの中から、一つだけ選ばれて、取りあげられたものである。このような文を、対照文 (contrastive sentence) という。たとえば (15a) は、箱をからにしえたいく人かの中で、*David* が実際にそれをやったことを示している。また (15b) は、*David* が箱になにかしえたいくつかの中で、実際におこなったのは、からにしたことであることを示している。 (15c) は、*David* がからにしえた対象のいくつかの中で、実際にしたのは箱であったことを示す。¹⁴ ときに、この (15c) は、さきの (6b) と同音ではあるが、異義である。つまり、後者の (6b) では、動詞と patient noun とが新しい情報を含んでいるのに対し、前者の (15c) では、patient noun のみが新しい情報を含む。対応する疑問文も

(17) What did David do ? (= 7b)

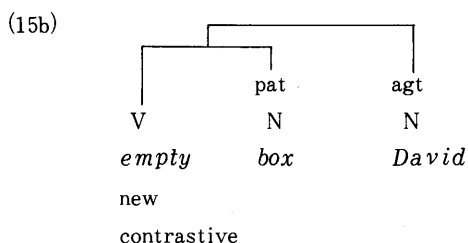
ではなく、たとえば、つぎのようである。

(18) Did David empty the box or the suit-case ?

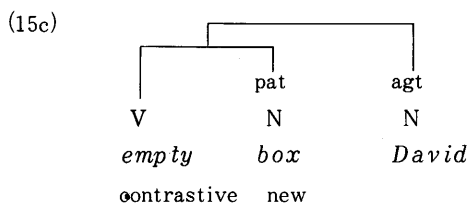
このように、対照文においては、一般に、新しい情報を伝えるのは一つの項目だけである。これに対し、対照文でない場合、通常文においては、名詞が一つでないかぎり、二つ以上の項目が新しい情報を伝える。 (15a, b, c) を、Chafe によって示せばつぎのようである。



David emptied the box.



David emptied the box.



David emptied the box.

ところで、つぎのように、二つ(以上)の項目が新しい情報を伝える、対照文もある。¹⁵

- (19) a. David emptied the box.
 b. David emptied the box.
 c. David emptied the box.

この場合、(19a)は、*David* と *empty* の一対が新しい情報を伝えるものである。たとえば、*George* が箱を *fill* することもできたかもしれない、しかし実際は、*David* が箱を *empty* したことを示している。(19c) と (6b) とは、新しい情報の分布が同じである。しかし、前者では、動詞に高い声の高さがあるのに対し、後者では、それが無い。また、(19)において明らかのように、対照文では、新しい情報を伝える項目間に *fall in pitch* のみられることが、その特徴である。

ここで、つぎのような文を考えてみよう。

- (20) a. Elephants don't like peanuts.
 b. Elephants don't like peanuts.
 c. Elephants do like peanuts.

(20a) は通常の文である。これに対し (20b, c) は、それぞれ、新しい情報が *don't*, *do* に含まれている文である。この場合、注目すべきことは、これらが対照文となることである。たとえば、(20b)は、すでに、象はピーナツが好きであるというようなことがいわれていることに対して、それは真ではないと述べている。一方 (20c) は、すでに、(20a) や (20b) のような否定文があって、それに対して、それはそうではないと述べている。

助動詞が新しい情報を含むとき、それらは、また対照文となる。

- (21) a. David can sing.
 b. David must have sung.

(21b) は、たとえば、

- (22) I infer that David did sing.

のように書きかえることができるものである。

5

新しい情報・古い情報という概念と密接な関係にある、日本語の「は」と「が」について考えてみよう。¹⁶「は」、「が」には、それぞれ、つぎのような用法がある。¹⁷

- (23) 太郎は走っている。

「主題」(theme): 太郎の話をすれば、彼は走っている。

「対照」(contrast): 太郎は走っている(が、花子は走っていない)。¹⁸

- (24) 太郎が走っている。

「叙述」(neutral description): ごらん、太郎が走っているよ。

「総記」(exhaustive listing): (いま話題になっている人たちの中で) 走っているのは太郎だけだ。

「主題」となりうるのは、文脈指示 (anaphoric) 名詞か、総称 (generic) 名詞でなければならない。つまり、すでに話題にのぼっている事物をさす名詞句であるか ((25a)), 指示対象が一義的に決っており、話し手と聞き手との間で、それが明らかであるような事物をさす名詞句でなければならない ((25b))。

- (25) a. ¹⁹太郎は私の友達です。
 二人はパーティに来ました。
 b. 人間は考える葦である。
 鯨は哺乳動物です。

だから、つぎのような文は、おかしいものとなる。

(26) a. *雨は降っています。

b. *おおぜいの人はパーティに来ました。

(26) は、しかし、たとえばつぎのようになれば、文法的である。

(27) a. 朝早く雨が降り出した…夜になっても
雨は降っていた。(文脈指示名詞)

b. 雨は天から降る。(総称名詞)

「対照」となりうる名詞句には、このような制約がない。したがって、(26)も、「おおぜいの人」、「雨」が、なにか他の名詞句と比較対照されるような文脈にあらわれるなら、それらは文法的となる。

(28) a. 雨は降っていますが、雪は降っていません。

b. おおぜいの人はパーティに来ましたが、
おもしろい人はひとりも来ませんでした。

ひとつの文には、一個の「主題」しかあらわれない。もしひとつの文の中に、二つ(以上)の「は」があらわれるときには、最初の「は」のみが「主題」をあらわし、他は「対照」をあらわす。

(29) a. 私は週末には酒は飲みます。

b. 私は週末には酒は飲みません。

c. 私は週末には酒は飲みますが、テレビは見ません。

(29a)の「週末には酒は」は、比較対照の意味あいがつよい。しかし、独立した文としては、おちつかない。この場合、(29c)にみられるように、その後比較の対象が明示されると、正しい文となる。これに対し、(29b)は、独立した文としても正しい文である。これは、非言語的コンテキストがふつうは positive であり、このような否定文が、positive な非言語的コンテキストと比較対照されているからであろうという。²⁰

「叙述」の「が」は、その述部が非習慣的動作か、存在をあらわす場合にきられる。

(30) a. 手紙が来ました。

b. 雨が降っています。

c. 机の上に本がある。

これに対して、述部が状態をあらわすか、習慣的な動作をあらわす場合には、「が」は「総記」の解釈しかうけない。

(31) a. 太郎が学生です。

b. 犬が動物です。

c. 太郎が毎日学校に行きます。

(30) は、独立した文としても自然な文である。しかし、

(31) は、きわめて坐りのわるい文である。これらの意味は、たとえば「いま話題になっている人物の中で、太郎だけが学生です」ということであり、つぎのような、特殊な文脈が必要である。

(32) a. だれが学生ですか。

b. なにが動物ですか。

c. だれが毎日学校に行きますか。

ここで、状態をあらわす、つぎのような文を考えてみよう。

(33) a. 私の子供が女です。

b. 私のクラスでは、2人が男で、6人が女です。

(34) a. 太郎が独身です。

b. 大部分の学生が独身です。

(35) a. 太郎と次郎が金持です。

b. ほとんどの学生が金持です。

それぞれ(a)の文は、「総記」の解釈をうけるが、独立した文としては不自然である。ところが、それぞれ(b)の文は、「叙述」の解釈をうける、きわめて自然な文である。²¹ このように、主語に、数詞や数量詞が含まれているときには、状態をあらわす述部であるにもかかわらず、それが「叙述」の解釈をうけるということがわかる。いいかえるならば、状態をあらわす述部の主語に、数詞や数量詞が含まれていないならば、その文は、「総記」の解釈の文としてならばよいが、²²「叙述」の文としては非文法的になるのである。

6

これまでの分析で、新しい情報・旧い情報という概念が、日本語の「は」・「が」に、顕著にあらわれていることがわかるであろう。

一般に、日本語の「は」は旧い情報をあらわし、「が」は新しい情報をあらわす標識であるといわれる。しかしながら、注18に記したように、英語における contrastive は、日本語における「総記」のみならず、文字通り、「対照」の解釈をうける文をも含むものである。このことは、日本語の「対照」の「は」は、新しい情報を伝えるものである、ということができよう。けっきょく、「対照」の「は」を除いて、一般に日本語の「は」は、旧い情報をあらわす標識であるということになる。²³

さらに、つぎのような文に注目してみよう。

(36) a. 太郎と花子と夏子のうちで、だれが一

番背がたかい。

b. 太郎が一番背がたかい。

ここで、(36b)の「太郎」は、すでに疑問文の中にあらわれているのであるから、文脈指示(anaphoric)である。ところで、(36b)の中で「太郎」がしめている意味的機能という点からすれば、それは、新しい情報をあらわしている。このように、旧い情報が新しい情報かという概念と、すでに話題にのぼっている事物をさすところの、文脈指示か否かという概念とは、別のものである。つまり、文脈指示という概念と旧い情報という概念とは、つねに重なるわけではないのである。²⁴すでに注14で示したように、Chafeは、このことから、新しい情報というのは、非対照文にあらわれる概念であり、対照文にあらわれるのは焦点であるというように、二つを区別しようとする。

日本語の「が」は、²⁵新しい情報をあらわす標識であるということに関連して、少し述べてみよう。

話し手の存在、出現は、話し手の会話が成立する前提である。したがって、話し手は、自分の存在、出現を新しい情報として提出することはできない。

(37) a. 太郎が東京に来た。

b. ?? 僕が東京に来た。

(38) a. 太郎があそこにいる。

b. ?? 僕がここにいる。

(a)文は自然な文である。しかし、(b)文は「総記」の意味にしかとれず、独立文としては不自然であり、「叙述」の解釈をうけることはできない。

さらに、「叙述」の解釈をうける文の出来事は、話し手が客観的に観察し、報告することのできる事象でなければならないということにも、(b)文が不自然である理由がある。これは、話し手はふつう、自分の意志でおこなった行動について、あたかも客観的な出来事のごとく報告することができないからである。もっとも、物語りの文では、上に述べたような制約も、ゆるめられるのが一般である。

なお、主語の「が」は省略することができず、主語が省略されている文は、すべて「は」、すなわち、「主題」の省略に由来するということができるが、これに関しては、久野(1973, pp. 219-236)にくわしい。

新しい情報・旧い情報という概念は、おそらくは、すべての言語に普遍的にみられる現象である。本稿において、われわれは、まず、この概念がいかなるものであるかを、英語を例にして考察した。そしてさらに、この概念が、日本語の「は」・「が」に、

いかにあらわれているかをみてきた。ただし、この複雑きわまりない「は」と「が」の用法については、ほんの、その概略しか述べていない。ともかく、これらに関しては、こんごの研究として、残された問題はおおい。(1973. 9)

注

1. この概念は、ブラーク学派言語学の構文分析の一基盤をなすものであり、それは V. Mathesius にはじまるといふ。以下の論議を、主として Chafe (1970) にそって進める。
2. 下線は、文中において、それがもっとも強い強勢(stress)をうけ、また、もっとも高い声の高さ(pitch)であること、つまり、音調の中心(intonation center)であることを示す。それは、とりもなおさず、新しい情報であることを示すものである。
3. これらに関しては、さらに Chomsky (1970)、Jackendoff (1972) や久野 (1973)、Kuroda (1972) を参照。
4. ただし、これが
One of the boxes is empty.
の意味で用いられることは可能である。しかし、ふつうの文脈においては、これは box 一般をさすことになる。(2b)の場合にも同じことがいえる。
5. nonrelative state には、empty のほか open, red, deaf などがあり、relative state である wide, loud, old などに対応している。くわしくは Chafe (1970), pp. 119 ff. 参照のこと。Chafe によれば、relative - nonrelative と generic - nongeneric とは対応するものであるという (Ibid., p. 170.)。ちなみに、generic - nongeneric の特性として、動詞に関しては、timeless, permanent - transitory, temporary などがあげられ、名詞に関しては、the entire class of objects - some particular object or objects などがあげられる。
6. ここでは、least marked sentence をさしている。
7. 通常の文ではなく、more marked な文や contrastive な文の場合については、後を参照。
8. ただし、それが文末にくるのでないかぎり、ふつう、動詞は表面的に、高い声の高さ(high pitch)を伴ってあらわれることはない。
9. あるいは object noun。Fillmore (1971) 参照。
10. いわゆる goal noun。
11. 下線が連続しているのは、高い声の高さが持続することを示している。
David gave Lisa a picture.
上の文との違いに注意。
12. とくに、p. 48 の fn. 49.
13. 注 8 を確認されたい。
14. 対照文と、そうでない文(noncontrastive sentences)とを比較した場合、後者でいう新しい情報は、前者では、

- むしろ焦点(focus)であろうという。Chafe (1970)ではこのように、新しい情報と焦点を相補的な概念としてとらえようとする (*Ibid.*, p. 224, fn. 3)。
15. 久野 (1973), pp. 37 ff. を参照。彼によれば、このような文は非文法的であるという。
 16. ここにおける分析は、久野 (1973) によるものである。
 17. 「が」には、さらに
私は太郎が好きだ。
のような、目的格をあらわす用法があるが、ここでは扱わない。
 18. さきに英語に関して述べた contrastive は、日本語における、この「対照」と、さらに「総記」をも含めた用法である。
 19. 「その太郎」、「その二人」という意味のときのみ、文法的である。
 20. 久野 (1973), p. 31。
 21. (34b)、(35b) は、それぞれ、つぎのようにとらえることができるものである。
学生のうちで大部分が独身です。
学生のうちでほとんどが金持です。
 22. 英語でも同じような現象がみられるという。Perlmutter (1970) によれば、述部が状態をあらわす場合、不定名詞を主語として用いることができない。
* A boy was tall.
* A man that she met was a hard-working accountant.
しかし、強調をうけた数詞、数量詞が用いられると、それらは文法的になる。
One boy was tall.
All boys were tall.
 23. ただし、これについては、さらに久野 (1973), p. 217 の注 5 参照。
 24. Chafe (1970), p. 260, fn. 2 にあげている英語の例で示せば、たとえば、つぎの文において、anaphoric な代名詞 *he* は、新しい情報をうけうる。
He emptied the box.
 25. 正確には、主文の「が」である。これに関しては、久野 (1973), p. 216 参照。

参考書目

- Chafe, W.L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Chomsky, N. 1970. "Deep Structure, Surface Structure and Semantic Interpretation." In Jakobson and Kawamoto (eds.), *Studies in General and Oriental Linguistics*. Tokyo: TEC Corp. Also in Chomsky (1972), *Studies on Semantics in Generative Grammar*. The Hague: Mouton.
- Fillmore, C.J. 1968. "The Case for Case." In Bach and Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 1971. "Some Problems for Case Grammar." In O'Brien (ed), *Monograph Series on Languages and Linguistics* 24. Washington, D.C.: Georgetown Univ. Press.
- Jackendoff, R.S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kuno, Susumu (久野 璋) 1973. 『日本文法研究』東京: 大修館書店。
- Kuroda, S.-Y. (1972). "The Categorical and the Thetic Judgment. Evidence from Japanese Syntax." *Foundations of Language* 9: 153-185.
- Perlmutter, D. 1970. "On the Article in English." In Bierwisch and Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*. The Hague: Mouton.